

---

# 現実を見る

平賀 暎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現実を見る

### 【Nコード】

N5832L

### 【作者名】

平賀 暎

### 【あらすじ】

主人公は現実主義の男と妄想癖のある男。フィクションをくだらないと言い、非現実を認めない男が、「異世界？ いつか召喚されると思ってたよ」という男に巻き込まれる話。

## プロローグ

「現実を見る」

叶<sup>カナヤマ</sup>帖が言った言葉が静かな広間に響く。

わかってる。今までであったことは全部現実で、ここが異世界ってことも。

わかってる。今日の前で起こっていることが現実で、こいつが本当に死んだってことも。

わかってる。わかってるけど、そんな簡単に認められるかよ。異世界に召喚されるなんて。今まさに魔王より強い奴と戦うはめになってるなんて。

危険な状況でありながら、俺の頭は次第に覚めていく。

認めたところで何も変わらない。足下の男が生き返ったりしない。敵が消え去ったりしない。

「潔く死ぬ覚悟はできたか？」

王が不適に笑いながら言った。

王が強いなんてあり得ないだろ。魔王じゃあるまいし。

そんなことを考えていると、叶帖が小声で話しかけてくる。

「どうする。このままじゃやられるぞ」

どうしようもねえよ。ここで終わりだ。まさかこんなメルヘンな世界で一生が終わるとは。事實は小説より奇なりって本当だったな。俺は目を閉じる。今更どうしようもないからだ。

ちようどその時、奇妙な感覚におそわれた。体の内側から引っ張られるような。

この感じ。できないんじゃないのかよ。まったく。あてにならねえな、魔法使いってのは。

俺たちはそのまま引っ張られるように広間から姿を消した。

## 第一章

「現実を見る」

俺は隣で浮かれる男にそう言い放った。

椅子に腰掛けた男は不満そうに反論する

「でも、この状況は異世界召喚ってやつだろ？ なら、魔王がいるかもとか魔法が使えるかもって思っても当然だろ」

俺は呆れながら答えた。

「まずそう思うことが間違ってる。異世界なんて存在しない」

「ここを異世界と呼ばずなんと呼ぶ。あんな広い草原、日本にはないぞ。それにビルも見当たらないし」

重症だな。ただでさえおかしな男って噂だから、この状況で発狂したか？

男の名前は叶帖カナヤマ 淳ジュン

見た目はがっちりした体型で体育会系に見えるが、噂によると妄想癖があるらしい。中二病にかかっているともいわれていた。

もう社会人なのに中二とは……。というか中二病とは一体？

しかしながら、俺もよくわかつちゃいない。

俺はため息をついた。

日本ではないことは確かだ。携帯は通じないし、窓から見える景色も森と草原ばかりだ。だからといって異世界という理由にはならない。確かに突然言葉が通じたり、変わった格好をした奴らがうるついでるが。

そんなことを考えていると俺の後ろの扉が音を立てて開いた。

「準備ができましたので、こちらへどうぞ」

さっき見た黒いローブの男が扉の前に立っている。

仕方ない。とりあえず行くしかないか。  
おれは渋々立ち上がり、廊下に出た。

案内されたのは薄暗い、例えるなら倉庫のような部屋だった。  
暗っ。なんだ、ここは。王様に会わせるって聞いたが。  
部屋の中央に動く影が見えた。

あれが王様……か？

そこにいたのは年老いた老人だった。格好は王冠にマントなどで  
王様らしいが、見た目はただのじいさんだった。

沈黙に耐えられなかったのか叶峠が話しかけた。

「王様。それで僕たちに何の用なんですか？」

僕たちじゃなく、おまえだけだよ。自称魔法使いが言ってる。  
召喚、つーか誘拐したかったのはおまえだけだった。

「単刀直入言うとするかのお。今回おぬしたちを呼んだのは、魔王  
を倒してもらうためじゃ」

ちっ。発狂しそつだ。なんでここには、変人しかいないんだよ。

魔王なんているはずがない。

「もちろん。そのためにここに来たです」

「しかし、我が国は魔王に人質を取られている。さらに仮初めの休  
戦協定があるゆえにたいした援助もできんぞ」

「承知の上です」

「おいおい、ちょっと待て。勝手に話進めんな。俺たちを誘拐して  
きた奴らだぞ」

二人の会話をさえぎる。

「それについては、悪いことをした。しかし、わしらにはもう他に  
方法がないのじゃ」

「仕方ないだろ。この国の人たちが戦うわけにはいかないんだよ。

仮初めとはいえ休戦協定があるからな」

叶帖が加勢する。

「わかったよ。勝手にしろ」

どうせ呼ばれたのはおまえだけだしな。俺は勝手に帰らせてもらう。

俺は扉を乱暴に開けて部屋から出た。

これからどうしたものか。召喚したなんて言ってる奴らとは話してもたいしたことは聞けなそうだな。

「ちよつと待てよ、佐藤。おまえの気持ちもわかるけど、ここは我慢しとかないと帰れないよ」

すぐに叶帖が部屋から出てきた。

「話は終わったのか？」

「とりあえずはね。詳しいことはまた明日話すって」

「そうか。しかし、その我慢つてのが、頼みをきかないと帰さないってことなら脅しじゃねえか」

「仕方がないよ。他にどうしようもなかったんだから」

「仕方ない……か。でも、問題はそこじゃねえ。」

「どうすんだ。存在しないものを倒すなんて」

「魔王はいるよ。いてもおかしくない。ここが異世界なんだから」

またかよ。つきあいきれない。相手が変人だから下手に動くと危ないし。もう休むか。

「もう今日は寝る。今夜はさっきの待ってたときの部屋使っているんだよな」

そういつと、俺は部屋に向かって歩き出した。

## 第二章

サトウ  
ダイスケ  
佐藤 帝助

これが俺の名前だ。

自分で言うのなんだが、細身で長身、眼鏡をかけていたから仕事ができそうに見えるが、まだ就職したばかりの新人だ。いや、早く帰らないとだつたになるだろう。

平凡な大学を卒業して、平凡な会社に就職してこのままこの平凡が続くはずだつたのに。あの日に何もかも崩れさるなんて。

その日は、朝からエレベーターの調子が悪かった。妙に遅かったり、一時的に止まったりしていた。昼に外で飯を食ってきて戻った時、ちょうどエレベーターの点検をやっていた。俺がいない間に動かなくなつたらしい。俺が階段で上がることを余儀なくされた。

昼飯直後の運動はやっぱりきついな。ちょうど止まるなんて俺も運がねえ。

ふと、前を見ると自分と同じように階段を上がる社員がいた。

こいつも運がねえなあ。確か叶帖つていったな。俺と同じ新人だけど、もうすでに噂が広がってたな。悪い噂だが。えーと、なんだつたっけ。確か……。

突然視界が遮れる。

なんだ。いったい。

次の瞬間、前から衝撃を感じた。そして、体が後ろに倒れていく。このままじゃ階段から落ちる。この高さはやばい。

と、思ったときに奇妙な感覚に襲われた。まるで、体の内側から引

っ張られるような。

なんだ、この気持ちの悪い感覚は。

突然、背中に衝撃を感じた。

あれ。案外、低かったみたいだな。

しかし、さつきから重い。これは……叶帖か。

こいつが落ちてきやがったんだ。

「おい。さつさとどけよ。重いだろっが」

そういつて、叶帖を乱暴にどける。

おっと。よく見えん。眼鏡がどっかいつちまったみてえだ。どこだ？

探しているうちにあることに気がついた。

床が違う。ついでに階段でもねえ。ここは一体？

考えていると誰かに声をかけられた。見上げるとフードの付いた黒いローブを着た男がいた。顔は暗くてよく見えない。目が悪いからでもあるが。

何語だ？ 聞いたことのない言語だな。それになんだ、その格好。ローブの男はまた話しかけてきたが、何を言っているかわからない。

何を考えているのか、突然頭を掴まれた。

慌てて手を振り払う。

何すんだ一体。

また、男が話しかけてくる。しかし今度は日本語で。

「あの、聞こえますか？」

「聞こえるよ。それよりここは何処なんだ」

日本語話せるなら初めから話せよ。

「聞こえるんですね。よかった。うまくいった。あつ。ここ、ここはヒドラ国です、勇者様」

はっ？ ヒドラ国？ 何処だよ、そこは。ここは日本だろうが。

いや、そのまえにユウシャってなんだ。えーと勇ましい者で勇者？

なら勇者って誰のことだ？ 俺か？ 俺のことなのか？



俺が一人で混乱していると隣で倒れている男が声をあげた。

「勇者って僕のことですか？」

おまえのことか。納得。妄想癖だって言われてたしな。で、ここ何処だ？

「そのはずですが……。勇者は一人のはずなんです」

それは当然だ。勇者とやらはこいつだろうからな。って俺入ってるの？ 可能性の中に。そういうのやめてくれ。しかし、ここ何処だ？

「俺は勇者じゃない。そんな柄じゃないし」

そんな虚構に巻き込まれたくないし。

叶峠が驚いたように言った。

「鈴木だっけ？ いたのか」

鈴木じゃないし。気付かなかったのか？

「佐藤だよ。ところで、おまえここが何処かわかるか？」

「何処って。異世界だろ。十中八九」

異世界？ ……。こいつに聞いた俺が馬鹿だった。仕方ない。自分でどうにかするか。

「なんだよ、その目は。信じてないだろ。いきなり場所が変わったんだ。異世界の可能性が高いと思うけど」

いやいや。異世界なんてないから。眠らされて拉致られたんじゃない？ いや、それも無理があるか。意識あつたしな。残念ながら、今は結論がだせねえな。とりあえず、今は少しでも情報を。

「あの、結局なんのために拉致つたんですか？」

黒ローブの男に聞くと、

「拉致つた？ というより、召喚ですが。理由は魔王を倒していただけためです。ただ、詳しい説明は王からお聞きになってください」  
王様がいるのか。本物か？ 何かヤバそうな感じがする。魔王を倒せって言ってる張本人だろ。

「わかりました。では、案内してもらえますか？」

「あつ。はい。準備がありますので、少しお待ちいただくことにな

ります」

俺たちは了承した後、黒ローブの男に連れられて歩いた。

今俺たちのいる建物は、見たところ石造りのようだった。窓からは草原と森しか見えない。にぎやかな声が聞こえるので、近くに町があるかもしれないが。

「ここでしばらくお待ちください」

通された部屋は、客室といった感じの部屋だった。

ここからしばらくたつた後に、王様に呼ばれ、理不尽な要求されて、部屋を飛び出して今に至る。

これからどうなることやら。今のところまともな人には会えないし。ここが何処かもわからないし。明日自分でどうにかするしかないか。

### 第三章

朝起きると見覚えのない部屋に少し驚く。

そうだったな。わけのわからないところに拉致されたんだったな。そういえば、色々あつて忘れてたが、俺の眼鏡がねえ。どこいったんだ？

仕方ないので、部屋を出て昨日いた部屋（黒ローブいわく勇者を召喚した）を探す。

見当たらねえな。案外広い。自称王様っただけはあるな。まさに城って感じた。そういえば、叶帖は何処で寝たんだ？ あっ。あれって。

角を曲がったところであの黒ローブを見つける。

「おいっ。その」

言いかけたが、さえぎられる。

「な、な、なにやっっているんですか。こんな所で」

「そっちこそ、何焦ってるんだ？」

「話はあとです。こちらへ入ってください」

案内されるまま入ると、ちょうど探していた部屋だった。

「ここだよ。俺が探してたのは」

そう言つて探すと、案外簡単に見つかった。

「探していた？ 何をです？」

手に持った眼鏡を見せながら言った。

「これだよ。ところでさっき何であんなに焦ってたんだ？」

「昨日、あなた様が急に部屋を出て行かれたので説明し損ねましたが、この国はもう魔王の支配下にあるといつても過言ではないからです」

「それって、かなり危険なんじゃ？」

「そうです。だから、私たちは表立って動けないのです。城の中だからといって動き回することは危険です」

だから、昨日あんな薄暗いところで。納得。

「わかった。以後気をつけるよ」

まあ、念のためな。魔王なんざいるわけがない。いるとしても自称魔王っていう危険人物だろ、たぶん。

朝食は先ほど寝ていた部屋でとった。トースト、スクランブルエッグなどで案外、普通だったので少し安心した。

異世界なんて言ってもふつうじゃん。変わったものが出てくるかと思っただよ。

食事が終わるとほぼ同時に部屋の扉が勢いよく開く。

「鈴木。入っても良いか？」

「佐藤だ。それにもう入ってるだろ」

「確かに。ところで、これから王様に詳しい話聞くんだが、おまえは聞くのか？」

「とりあえず、聞いてみるよ」

俺はそう答えながら、別のことを考えていた。

情報が少なすぎる。ここから逃げるにしても、ここが日本じゃないってことは確実に船に乗らなきゃならない。パスポートもない。金もない。あとは少しでも情報を集めるしかない。ただ、魔王を本気で信じてるような奴らの話を聞いて意味があるかってことが問題だな。彼らが嘘をついているようにも思えない。ということは誰かに騙されてるか狂ってるかのどっちかだ。やっぱり、今のところ聞く以外の選択肢がないな。

「どうしたんかなやみでもあるのか？」

叶帖が心配そうに聞いてきた。

この状況が悩みだよ。

「だいじょうぶ。なんでもない。話聞きに行くんだろう。さっさと行くぞ」

俺たちはあの薄暗い部屋に向かった。

「ようやく来たか」

薄暗いからか威厳を全く感じない老人が言った。

「佐藤。今、失礼なこと考えたろ」

「いや、別に。そんなことより、この国が今どういう状況なのか教えてもらえますか？ 魔王に支配されているんでしょう？」

「そうなのじゃ。休戦協定も、名ばかりのもので実際は魔族どもが我が物顔でこの国を歩いて民を苦しませておる」

「そんな。酷い」

眉間に皺を寄せている。

何本気にしてるんですかあ。叶帖さん。そんなはずないですよ。魔王なんていませんからあ。

俺は話を進めた。

「で、魔王はどこにいるんですか？」

「それが、わからないのじゃ。魔王の部下なら何か知っているかもしれないが」

使えねえ。何が王様だ。もう、ただの自称王様だな。殺させたい相手の居場所くらい調べとけよ。

「ってことは、まずその魔王の部下を倒すんだな。魔王の部下が何処にいるかは知ってますか？」

叶帖がうれしそうに自称王様に聞いている。

こいつ。楽しんでやがる。

「魔王の部下なら、ここから北に三十キロほどのところにある街に一人、東に二十五キロのところの港に一人いるはずじゃ」

港。港だと。しかも東。東と言えば東経百三十五度。東経百三十五度といえは日本。帰れるぞ。帰れないはずがない。

「ひ、東、東にある。いや、東にいるんですね」

様子の違いに気づいたのか叶帖が不思議そうな顔をしている。

「どうしたんだ。東に何かあるのか？」

港があるつつつてただるーが。港だぜ。船だぜ。帰れるんだぜ。

「聞いてなかったのか？ 港に魔王の部下がいるんだよ。そっちの方が近い」

「聞いてたよ。確かに近いな。王様、俺たちはとりあえず港に向かってみます」

俺たちつて。一緒にすんな。

「不満そうだな。おまえは行かないのか？」

「いくよ。動かないとどうしようもないからな」

協力はしねえよ。

叶帖は俺を一瞥してから王様の方を向いた。

「では、いつてまいります。必ず魔王を倒して帰ってきます」

ここに帰ってくんのかよ。日本に帰れよ。

何か忘れてる気がして考え込む。

「ちよつと待て。魔王がいると仮定して、ついでに倒すと仮定しても良いが、どうやって倒すんだ？ 仮にも王だ。一般人二人でどうしろっていうんだ」

呆れた顔で叶帖が俺を見ている。

「佐藤。聞かなかつたんだっけ？ あつちの人間はこの世界に来る

と特殊な能力が使えるようになってるんだっけ」

はあ。そうなんですか。

困惑しながらも聞き続けた。

「だから、僕たちみたいいな普通の人でも十分やっていけるんだっけ」

「だから、おまえみたいなのが連れてこられたんだな」

そんなこと信じるおまえみたいいな馬鹿がな。

「それなら、僕じゃなくてもいいってことになるだろ。僕だった理

由はな。この世界に順応できる大人を探してたからだって」

納得できた。つまりおまえみたいな変わった大人を狙ってたってことだな。それに俺は巻き込まれたと。

「そうか。よくわからなかったが、だいじょうぶなんだな」

顔を見れば、問題ないと思っっていることはわかったが、一応確認する。

「だいじょうぶだ。何の問題もない」

どうせすぐに帰れるんだから。問題ないか。

「わかった。じゃあ行こうか」

## 第四章

王様はたいした援助はできないと言っていたが結構様々な援助してくれた。

まず、金である。魔王を倒すための旅の資金と報酬だと言って渡された。前払いは気前が良いと思う。詳しい金額はわからないが、金貨、銀貨それと銅貨があった。黒ローブの自称魔法使いがいうにはかなりの大金らしい。

次に、案内人である。この世界……じゃなかった。この国での常識を知らないの、苦労するだろうと案内人が付いて来ることになった。名前は……。覚える必要などない。というか長すぎて覚えられなかった。

その他にもいろいろしてもらったがわざわざ説明するほどのことではない。誰になのかはこの際聞くな。

俺たちは今、草原を歩いている。

原因は俺だ。最低限の準備だけをさせて街を出た。

叶帖は城下町とやらを見て回りたかったらしいが、そんな時間はない。

少なくとも俺たちは、会社を無断で早退と欠勤してるんだぜ。さつさと帰らないとクビだぞ。クビ。こいつ一人ならどうでもいいが巻き込まれるのはごめんだ。

「勇者様。そんな難しい顔をしてどうしたんですか？ ボクでよか



「だったら、相談にのりますよ」

小柄な男が言った。

「案内人、勇者はあいつ一人だ。俺は違う。それにたいしたことじゃない。気にするな。」

案内人は不満げに文句を言う。

「ちゃんと名前で呼んでくださいよ。さっき何度も言ったじゃないですか。ボクの名前はカトレアトス。カストル。カガ。カンドラ。カンバレルラです」

そう言っつて青い瞳でじつと見てくる。

その瞳の色に金髪で日本語しゃべってるのが気になる。日本以外で普通に日本語を話す国なんてあっただろうか。

「長すぎるだろう。わざわざ覚える必要もない」

どうせそう長くは一緒にいるわけではないからな。

ようやく案内人はあきらめたようだった。

「そろそろ森に入るぞ」

叶帖の声で前方を向くと、十二階建ての建物ぐらいの高さの木々が生い茂っているのが見えた。

城から見たときはもつと低いと思った。どうやら今朝までいた城のある王都とやらは周りをこの高い木々の森で囲まれているらしい。高っ！ 何て木だ。もしかしてこの森を壁にするためにここに王都が作られたのか？ もしそうなら、そのせいで港がまったく見えない。

「この森より先は獣や魔獣が出るから気をつけてください」

「わかった。ついに出てくるのか」

楽しそうに言う叶帖が少し気に障る。

何がそんなに楽しい？ 魔獣はいないとしても、獣は危険だと思っぞ。それに、さつきも思ったが何なんだその格好は。

あらためて叶帖の格好を足下から頭まで見て呆れる。どう考えても現代には似合わないからだ。鎧に兜、腰には剣までつけている。

これが最低限の準備か。本当に魔王を倒しに、いや、殺しに行く

つもりなんだな。本当にわかってんのか。例え魔王と呼ばれていようが、犯罪になるぞ。

そう思うが、声には出さない。どうせこいつには言っただってわからないと思っっているから。

森に入ると少し不安を感じた。

異国の森だしな。それに獣が出ると言ってたし。

思わず鞆の中の短刀を握る。

もちろん自分で買ったわけではない。叶帖に魔王と戦うんだから武器くらい持てと言われた。さすがに魔王なんてものと戦う気はないが、変わり者の多いこの国で護身用として持っていた方がいいだろうとは思っ。

着々と前に進んで行くが未だに何か出てくる気配はない。木の葉で隠されて空が見えないのが心配だが、方位磁石があるので問題はなかった。

たまに動物の鳴き声があるけど、案外安全そうだな。ところで…

「どうしたんだ、叶帖。俺の顔に何かついてんのか？」

叶帖がこつちを見ているのが気になり訊いてみる。

無言のままだ。その手には剣が握られている。

なんだよ。それはちよつと怖いぞ。まるで襲いかかってきそうなのよ。

っ！ ちよつ、待って。本気か？

目の前では今まさに叶帖が剣を振りかぶっている。

「どうしたんだよ。なにがあった？」

訊いても反応がない。ついでに目の焦点があってない。咄嗟に反応したいができるわけがない。おもわず目をつぶる。

これはやばい。どうした。ついに頭がいかれたか？  
剣が刺さる音がした。

「大丈夫だ。もう終わったぞ」

おそろおそろ目を開けると、叶帖の剣はバスケットボールくらいの大きさの生物に刺さっている。

クモ、だよな。でかいけど。ものすごくでかいけど。バスケットボールに足が生えてるって感じだけだ。

「そのクモって猛毒持つてるんだって。カトレが言ってたぞ。危なかったな」

カトレって……案内人か。でもお前の方が危ないだろう。殺されるかと思っただぞ。

「おい、案内人。あんなのがこの森でよく出てきたりしないよな？あんなでかいクモ見たことない。しかも、体がでかいつてことは餌もでかいつてことだ。あんまり虫は好きじゃない。特にでかいは。」

「魔獣が出てくるって言いましたよね。あんなのはまだ序の口です」「そうこなくつちゃ。張り合いがないな」

そこ！ 喜ぶな。これ以上進むなんて平和ボケした日本人には無理だ。絶対に無理だ。危険な森通らなきゃ進めないってのもおかしいが、戦争とか紛争と縁のない人間を戦わせようって考えもおかしい。せめて安全な道を一本くらい作つとけよ。

「おい、佐藤。早く行くぞ」

気がつくとも叶帖たちとずいぶん離れている。

「ちょっと待て。置いてくつもりか！」

この森で一人はやばい。少しは待てよ。

俺は急いで叶帖たちのところに走って行った。

腕時計で見て約四時間後ようやく森を抜けた。空はもう赤く染まりはじめていた。

結論から言おう。魔獣なんていない。森ではクモをはじめ危ない虫、獣は多数いたが魔獣なんてものは影も形もなかった。案内人は普段なら一匹くらいあうつて言ってたが嘘か勘違いだろう。いないものにあうなんて不可能だ。

俺は今珍しく上機嫌だ。この国に来てから変人だらけで疲れたが、やっと帰れそうだからだろうか。

もう肉眼で見える位置に港がある。

「もう港なのか。残念だ。魔獣にあいたかったよ」

逆に叶帖は不機嫌だった。

「もう過ぎたことだろう。今は目の前のことだけ考えろよ」

「そうですね。あわないほうがいいですし、港には魔王の部下がいるんですよ」

案内人の声が震えてる気がする。

叶帖も震えてる気がするが、こっちは武者震いってやつだろう。

「そうだった。魔獣はいなかったけど、魔王の部下がいるんだったな。魔王の部下ってことは魔族かな」

そうだった。魔獣はいなかったが。自称魔王の部下、つまり精神的にも危ない人がいるんだったな。

港に近づくとつれあたりは少しずつ暗くなり、港町にも明かりが点きはじめている。

夕方とはいえそれとは無関係の重苦しい雰囲気町を支配していた。

なんだこれは。空気が重い？ っていうのか？ 自称魔王の部下なんて馬鹿にしてたけど、思ったよりヤバそうだな。

そんな考えが頭をよぎった。

## 第五章

港町に入ると周りももうすでに真っ暗だったので、馬鹿を説得して宿に泊まる事にした。

「おい。なんで止めるんだよ」

叶帖が睨んでくる。けれど俺にとっては醜い顔でしかない。

「さつきいつたる。この暗闇じゃ土地感のある相手のほうが圧倒的に有利だからだよ」

戦うにしても、船で逃げるにしてもな。

「仕方ないですよ。叶帖様。佐藤様のいうとおりですよ」

「さま？ 様って聞こえた気がしたなあ」

誰が様だつて。

「さん。佐藤さんでした。あははは……。はあ」

案内人は笑ってごまかす。

「いやなら、いやつて口で言ったらどうだ」

「いったはずだが」

たぶん。いつてないかも。

「そんなことより、これからどうしようか」

「独り言とも質問ともとれることを叶帖がつぶやく。

「まずは、休め。危険人物、じゃなくて魔王の部下とやらがいても神様じゃねえんだ。俺たちがここにいとすぐにわかるわけがない」

「そうかなあ」

「それにもしバレてたら、王様が俺たちに魔王を倒させる計画はもう破綻してるだろう」

「どうしてですか？」

本当にわからないと案内人が訊いてくる。

「まだ俺たちは何もしてないだろう。その状態で俺たちに目をつけ  
てるんだつたら、計画がどこからか漏れてるだろうからな」

「確かにそうだなあ」

完全には納得していないようだが、どうやら説得に成功したよう  
だ。

そして、今日の疲れを取る事ために眠りについた。叶帖は。

「おい。案内人。待てよ」

部屋に向かう金髪の背中に声をかける。

「なんですか？ 佐藤さ、さん」

「訊きたい事がある。色々とな」

案内人の話によると魔王がこの国に現れたのが今からおよそ四年  
前、それから一年で軍隊を作り上げる。そしてニクス国を名乗り攻  
め込んできたらしい。二年間の戦いの後、魔王軍からの提案で休戦  
協定を結ぶことになる。

「そのまま戦ってたら相手の圧勝だったんだろう。なんでそんな提  
案したんだ？」

これがご都合主義ってやつか？ 皆殺しにしたほうが反逆される  
ことも俺たちが被害をこうむることもなかっただろうに。

「それはわかっています。もしかしたらカロン国のせいかもしれ  
ません」

案内人は考え込んでいる。

また新しい設定が出てきやがったか。仕方ない。訊くか。

「カロン国のことも含めて説明してくれ」

「カロン国というのはヒドラ国の隣国です。大きな国でこのメイオウ大陸のほとんどを支配しています。そして、ボクの見解というのはそのカロン国を警戒してではないかと思えます。姫様が人質に連れて行かれたという話はしましたよね」

「ああ。確か聞いたな。そういえば、王族とはいえ人質としては物足りないよな」

「物足りないというのは賛成しかねますが、ただの王族ならおかしいかもありませんね。跡取りでもないですし」

案内人が意味ありげに言う。

「ただの王族じゃないならなんなんだ？」

「姫様は前回の勇者様の娘なんです」

「えっ。てえことは王妃が勇者だったんだよな。王妃が魔王を退治すればよかつたんじゃないか」

「そういえば言うてませんでしたね。王妃様はもうお亡くなりになりました。ついでに言うなら今回のことは極秘ですから王族が直接動くことはできません。勇者様のお子さんを人質にしているんですから」

勇者の子供が人質だとまずいのか。そりゃもし怪我させたら国民になんか言われそうだが。

考えてみたら案外すぐにわかった。

「つまり危険だからだろう。姫が。姫の命ではなく姫そのものが」  
「まあ、そういうことになりますね。勇者の血を継いでいるのだから、特異な能力を持っていて当然です。それをもし魔王に悪用されたら、大変です。だから油断しているうちに討伐しなきゃならないのです」

案内人は途中から感情的になっている。

しかし、やっかいだな。相手には姫兼兵器がいやがるとは。でも、俺には関係ないか。明日にや帰る目処がつきそうだしな。

「ありがと。よくわかったよ。もうずいぶん時間がたったしそろそ



る寝るよ」

「お役に立ててなによりです。おやすみなさい」

俺は案内人に背を向けて部屋に向かう。

この時、俺は自分の計画がこの港の船とともに沈没することを知らなかった。

## 第六章

清々しい朝だ。誘拐二日目にしてはいい気分だ。なんといつても、帰れる見込みがあるからな。海だし、港だし。そういえば、海は久しぶりだな。昨日は暗くてよくわからなかったけど、今は明るいし見られるな。

そんな取るに足らないことを考えながら枕元の眼鏡をかけた。

今、何時頃だ。時計がないからわからん。とりあえず起きるか。

俺は朝食前に叶帖を起こそうと思いいつのいる部屋に向かった。

「おい、もう起きてるか。朝だぞ」

扉を軽くたたくが返事がない。試しに開けようとするすると簡単に開いた。

「不用心すぎるぞ。魔王の部下とやらがいるんだろう。鍵くらいかけ……。あれ、いない」

そこはもうすでもぬけの殻だった。

「こんな朝早く荷物持つてどこにいったんだ」

そのとき外で爆発のような大きな音が聞こえた。

考えるまでもなかったようだ。すこしは俺を待ってるよ。役にたつかわからないが船で帰る前くらいは協力してやったのに。

俺は宿の出入り口に向かって走り出した。

佐藤が起きるずいぶん前に僕は宿の前の道にいた。

「勇者様、本当にいいのですか？ 佐藤さんを連れて行かなくて」

「いいの。僕が勇者なら彼が戦う必要はないからね。それに昨日遅くまで話し込んでたみたいだし」

カトレが驚く。

「気付いてたのですか」

「ああ。昨日なかなか寝付けなくてね。今のままじゃ魔王の部下にすら勝てないってわかってたし。だからちよつとトレーニングをしててね。起きてたんだよ」

「大丈夫ですか。もうすこし眠ったほうがいいですよ」

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。仮にも勇者だからね」

僕は明るく答える

「君は大丈夫かな？ 戦える？ 残ってもらっても良いけど」

「滅相ありません。ボクは案内人ですから最後まで付いていきま  
すよ」

「最期までか。わかったよ。じゃあそろそろ行くこうか」

僕たちは宿をあとにした。

「まず、どこにいるか探さないかね」

僕たちは今港への道を歩いている。建物が木や石できていて改めて世界の違いを感じさせる道である。

僕がいうとカトレはきよんとしている。

「それならもうわかってますよ。港の端にある倉庫です。今はもう倉庫とは言えないですけど」

「どつやって調べたんだ。そんなそぶりなかったのに」

「こっちは驚いているのに、カトレは当然だという顔をしている。

「隠す必要がないからですよ。彼らがここにいる理由は主に貿易の管理です。不穏な動きがないか監視しているのです。どこにいるかはつきりしているほうが都合がいいのでしよう。もしも隠れなければ行けないのはボクたちのほうです」

「確かにそうだな。ならすぐにも行けるかな」

「納得してうなずく。」

「でも、すぐでいいのですか。勇者様の力がまだわかっていませんよ」

「僕は笑いながら言う。」

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。さっきトレーニングしてたつていたよ。その力のトレーニングのことだから。安心して良いよ」

「そう。だいじょうぶだ。極めてはいないけど実践レベルではあるはずだ。もし極めれば最強になる部類の力だし。」

「自分にそう言い聞かせて目的地へと走り出す。」

「待ってください。そんなに急いでどうしたんですか」

「なんでもないよ。気にしなくて良い」

「ボス戦に緊張するのは当然だよ。現実ならなおさらだ。早めに終わらせて早く宿に帰ろう。」

「そんなことを考えているといつの間にか着いてしまった。」

「それじゃあ、入りましようか」

「まだ、心の準備が。」

「正面から入るのか？」

「勇者ですし、正々堂々といくのかと思ひまして」

「でも隠れなきゃならないのは僕たちだし。裏から行こう」

「カトレは首を立てに振った後裏口まで案内してくれた。」

「行ってくるよ」

「そうとうと僕は背を向けて扉に手をかけた。」

「ちよっと待ってください。ボクも行きますよ」

「カトレも戦えるのか？」

思わず聞くと少し誇らしげに答える。

「もちろんです。これでも魔法使いの端くれですから」

「なら、問題ないな」

扉を開けて入ると中はずいぶん薄暗かった。どこからか光が入ってきているようだが、照明はない。

奥のほうから喧騒が聞こえてくる。

「あっちになにかいるのか？」

進んでいくと広い部屋に出た。

「これは……」

端のほうで少しの間動きを止めて部屋の中を見渡す。そこには、何百もの獣が所狭しと並んでいる。

「魔獣ですね。だから、森にいなかったんですね。ただ、森にはもつと多くの魔獣がいましたから。ここにもみえないだけでもつというかもしれませんが」

カトレは一人で納得しているが、これはまずいと僕は内心焦っていた。

もしかしてばれたのか？ 勇者が召喚されたことが。もしかしたらこの街にいることもばれてるかもしれない。もしそうなら宿の佐藤が危ない。何の力もないのに。早く終わらせて戻らないと。

「よし。はじめよ」

「いったいこの量をどうするんです？」

カトレは驚いてはいるが興味のほうが勝っているようだ。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。まあ、見ててよ」

目を閉じて集中しないと。まずは、そうだな。炎のイメージでいいかな。燃えるような赤。体が溶けてしまいそうな熱。それからもつと具体的なイメージがほしいな。ガスの臭いとかいいな。肉の焼ける匂いもいいかも。そんな感じで。イメージができてきた。

「あれ？　なんか臭うな。なんでしようこの臭い」

「すこし黙っててくれ。イメージがくずれる」

「はい！ すみません」

それから数分間イメージし続けた。ガスの臭いが強くなってきた気がする。

「もうすこしだ。このまま。燃える。焼ける。焦げる。そして……」  
目を開けて魔獣の大群を見据える。まだこちらには気づいてないようだ。

燃え上がれ。

そう頭の中で叫ぶとそれに呼応するかのように部屋の温度が上がりに始める。

「ここは危ない。さっさと出るよ」

ふたりで急いで建物から出ると近くの物陰に隠れる。

部屋の中では温度の上昇により火がつくとまるでそこにガスがあるかのように爆発を引き起こした。

「魔法……じゃないですよ。詠唱してませんでしたし。勇者の力ってやつですか」

カトレは呆然としている。

「ああ。そうだよ。どうやら想像を実現する力みたいなんだ。この世界に来たときから使ってたみたいだし」

「ここにですか？」

「そう。こっちに来て最初に佐藤は魔法かけてもらったみたいで言葉が通じてたけど、僕はかけてもらった覚えなし。日本語じゃないのにな。それに、森で思いのほか剣がうまく使えたし。勇者だから当然かなって思ってたけど」

「すごいです。これなら魔王討伐も夢じゃないですよ。何か名前はありますか？」

「幻想起こし。イメージクリエイター」

咄嗟に思いついたことを言ってみる。

「なんか強そうですね」

心底感心しているようだ。

「冗談だよ。言ってみただけだ。ぼくはラノベあんまり読んだこと

ないし」

ちよつと罪悪感がわいてしまった。

「ラノベってなんですか？」

「気にするな。それより早く行こう」

倉庫まで戻ると（正確には倉庫があつたはず場所）残骸しか残っていない。

「やっぱりすごいですね」

「ちよつとやりすぎたかな。もしかして魔王の部下も倒せちゃったかも。話し聞きたかつたんだけどな。魔王の居場所とか」

がっかりしていると、物音が聞こえる。どうやら瓦礫の下からのようだ。

「まだ生きてるやつがいるのか？」

数歩後ずさりする。

瓦礫の下から出てきたのは黒っぽい紫の肌をした背丈が二メートルはありそうな大男だ。牙がはえていて耳の先はとがり目は血走つたように赤い。

「あれはエルフだな」

「違います。エルフは現実にはいませんし、もっと美しいものだと言われています」

「わかつているよ。魔族だろう」

「正確に言つと魔族の中の魔人です」

「何か違うのか？」

「魔人は二足歩行。それ以外が魔獣です」

「ほお。勉強になるな」

「感心している場合じゃないですよ」

それもそうだな。

そう思い魔人を見る。

目が合うとそれはおもむろに口を開けた。

「おマエ。ネオイジユスサマのテキか？」

ものすごく睨まれている。

ネオイジユスつてのが魔王の部下かな。それとも魔王かな。どっちにしても。

「まあ、そうなるね」

僕は平静を装って答えるが内心緊張していた。

「ならば、ここでコロす」

そういつと魔人は太い腕を僕めがけて振り落としてくる。

それを軽々とかわし考えた。

わざわざ宣言する必要あるのか？ 避けやすくなるだけじゃない。現実的じゃないな。じゃない！ 何考えてんだ、僕は。今はこれをどう倒すかってことだけを考えないと。とりあえず……。

剣を鞘から抜いた。あまつた左手のひらを魔人に向けてつぶやく。

「轟け。雷鳴」

そういつと手のひらから一筋の電光が閃き魔人に直撃した。

よかった。うまくいった。簡単そうなのはうまくいくな。でも効いたかな。

魔人は相も変わらずそこに立っていた。

効かなかったか。あの爆発で生きてるんだから当然か。

「勇者様！ 後ろです」

カトレの声で後ろを向くとさっきまで目の前にいた魔人が立っていた。

速い！ あの巨体でこのスピード。間に合わない。

剣を構えて相手の拳を受け止めるが、圧倒的な力の差で僕の体は宙に放り出された。

「なんつー衝撃だ。まともに食らったら、ひとたまりもない」

すぐに前を向くとそこにはすでに奴がいた。

これはやばい。魔人がなにかしらの能力を持つてるとは想定内だったけど。これはやばい。

魔人は無表情で拳を振り上げた。

そこに野球ボール大の火の玉が無数に当たる。

「勇者様からはなれる」



カトレ。気持ちは嬉しいけど、正直意味ない。でも考える時間はあった。

魔人はカトレを無視して拳を振り下ろしてきた。

僕はそれにぶつかると右手を握り前に突き出す。ぶつかると両者の拳は動きを止めた。

魔人は若干驚いている。僕は微かに笑っている。

「無事ですか、勇者様」

心配そうにカトレが見ている。

僕は一旦魔人から距離を取ってから言った。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。どうやらコピーまがいのこともできるみたいだ。今のは相手の殴りの衝撃を模倣してみたんだ。勇者の力だね。案外うまくいった。まあ、うまくいかなきゃ困るし、受けたばかりだから当然かな。」

これならあれもうまくいくかも。やってみるか。

そう思い立って魔人のほうに向き直った。その表情は明らかにさつきより警戒している。

警戒したって無駄だよ。

僕は両腕を前に突き出して叫んだ。

「エターナルフォーブリアード!!」

そうすると魔人の周囲の温度が急激に下がり……。ではなく上がり爆発する。その衝撃でまたもや僕の体は空を舞った。

少し前のことなら自分で起こした爆発もコピーできるとは。便利だな。

起き上がると待つてましたとばかりにカトレがのぞいていた。

「ブリアードじゃないんですか？」

「相手に技名をばらすようなやからはここにはいないよ。あと本当に魔法使えたんだね」

「信じてなかったんですか。役立ってませんでしたけど」

カトレはうなだれている。

「それより、あの魔人は？」

「見当たりませんが、あの爆発をもろに受けたんです。無事なはずがありません」

「一回目は効いてなかったみたいだけどね」

「あれは魔獣が盾になったとか直撃しなかったとかそんな感じだと思えます」

見当たらない以上倒したと仮定するかな。しかしあれは魔王の部下だったのか。部下の部下だったのか。

「ゆ、勇者様。あれ、あれなんででしょう？」

カトレの顔がすこし青ざめてる気がする。

指差すほうを見ると水の壁があった。

「港だし、海だし、津波じゃないかな」

よし、逃げるか。でも、なんでこんな急展開？

僕とカトレは必死になって町のほうに走るが、努力も虚しくあっけなく水の流れに飲み込まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5832/>

---

現実を見る

2010年10月8日14時00分発行